エスエス

周防　夕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エスエス

【Ｎコード】
Ｎ０７１０Ｒ

【作者名】
周防　夕

【あらすじ】
――俺は自由が欲しいだけだ。
彼はそう言った。その言葉が僕へ心の穴を自覚させた。それが全ての始まりだった。

現代アートのオブジェの様になったガードレール、甲子園の試合の途中で空で固まるボール、さまざまな超常現象が世を騒がした。それは超能力に覚醒した　１０代の少年少女によって行われたものであった。国さえも超能力者の存在を認め、彼らを研究する『超能

研』という機関が開設される。
　それから7年、学校の検査で超能力者陽性と診断された青年、白銀譲（しろがねじょう）は超能研に収容され平坦な日常を送っていた。そこへ突如現れる赤髪の青年ラク。彼らは出会う。そして……

1．招待

1．招待

1．1

――俺は自由が欲しいだけだ。

彼はそう言った。その言葉が僕へ心の穴を自覚させた。それが全ての始まりだった。

七月十五日（木）

僕は一人で暑苦しい小部屋にいた。七月半ばになっても冷房は付かず、まるでサウナ状態である。肩肘をついてベッドに寝転んで映画のＤＶＤを観ていた。Ｔシャツが汗を吸ってへばりついて気もちが悪い。

四季は日本の良い所だとは思うが、春と夏の間に存在するこの時期は好きになれない。有り余る湿気の誘惑で、髪の毛が自分勝手に主張を始めだす。天然パーマに優しくないのだ、梅雨は。

十七型のブラウン管テレビに目をやる。画面の中では、ニット帽をかぶった主人公が仲間をひきつれボートに乗っていた。暑くて寝つけなかったからＤＶＤを流してみたものの、意識が散漫して集中できやしない。俳優の毛穴などどうでもいい所に目が行ってしまう。監督もサウナ空間にて、きゅうくつな画面で見られることは想定していなかっただろうな。

時計を見ると午後十時過ぎていた。そろそろ布団に入ろうかな。寝つけるかは不安だけど。

（……なんだ、これは）

衝撃的な映像が視界に流れ込む。それが眠気を頭から蹴散らした。波紋が見える。テレビからではない。部屋のコンクリートの壁がまるで液体のように波打っている。

（いったい、何なのだ！）

壁から手が突き出る。それに続いて鮮やかな赤が映る。
「お邪魔させてもらう。っとお楽しみの最中だったか」
壁をすり抜けて、赤い野球帽を被った青年が入ってきた。年は僕とそう変わらない、高校生くらいに見える。誰なのだ、この男は。
彼の身長は高校生の平均くらいの僕と比べても一回り低い。であるのに只ならぬ存在感をまとっていた。それは彼の両目から放たれているものだろう。奥二重の下に居座る二つの瞳には異様な深みがあった。まるで魔力を込められた黒真珠のようだった。
彼の目ばかり凝視しているのに気づき、視野を広げる。顔全体をじっくりと眺め見た。右目の泣き黒子が目についた。そんな特徴的な点があるのに、彼にはまるで見覚えがない。
青年のその漆黒の瞳が僕をとらえた。彼の目つきが肉食動物を思わせる鋭いものへと変わる。僕は警戒を強めて、睨みかえした。
「俺はラク、宍戸楽太郎。よろしくな」
ラクと名乗った彼は愛想良く、柔和な笑みを浮かべた。自己紹介をしてくれるのは有難いが、それだけでは情報不足だ。なぜこんな時間に、『超能研』の寮の個室にやってくるのだ。しかも壁を通りぬけて。
彼は呆然とする僕を見やって片頬を釣り上げた。その背後の壁面から細長い指が飛び出る。更なる来客だった。
「失礼します」そう言って入ってきたのは、少女とも、大人の女性でもない美人だった。
彼女はラクと名乗った青年より拳一つほど背が高く、女性にしては背が高いほうだろう。肩まで伸びた髪は栗色に染められていた。ぷっくらとした唇が印象的である。大人びて見えるけれど高校生にも見える。手足は細長くすらっとしていて、モデルとしてファッション誌に載っていてもおかしくない。
彼女は僕に挨拶する気もないようで、髪を指でいじり始めた。美少女というよりは、美人といった方が合いそうだ。しかし、今は目の保養と単純に喜んでいる場合ではない。

「……何ですか、あなた方は？　何の目的で僕の部屋に？」
「あんた、シロガネジョーだろ？」
人の言葉を遮ってラクが尋ねてきた。疑問に疑問で返さないで欲しい。白銀　譲、それは確かに僕の名前だ。なぜ面識のない彼が知っているのだろう。
ラクはズボンのポケットに手を入れ、小さなメモ用紙を取り出して読み上げた。
「都内有数の進学校、黒西高校二年。学年は俺とタメみたいだな。……光線（ライター）操作の能力者。一年前に超能力者と認定されて、この『超能研』にぶちこまれた。と、ここまでは合ってるか？」
彼は僕の情報をつらつらと述べた。それは確かなものだ。僕は春の身体測定で『超能力・弐種陽性』と診断され、超能力研究施設であるここ『超能研』で、検査のため半強制的に寮生活を送らされていた。
「それで、君は何なのだ？　ここへ来た訳を説明してくれ！」
語気は自然と強くなっていた。こうも焦らされるて苛立ちがたまる。
超能研の研究員や事務員じゃないかと考えた。しかし年齢からも服装からもそれはありえない。彼は着くずしてはいるものの『超』とワンポイントの入った半袖のワイシャツと灰色のスラックスを身に着けている。これは僕も昼間に着ている能力者用の制服なのだ。彼も超能研へと収容されている能力者に他ならないだろう。
走行考えていると少し頭が冷えて、彼らの格好と見比べて自分のよれよれの部屋着が恥ずかしくなっていた。
「俺も白銀譲さんと同じ境遇さ。だから、そんな睨みつけんなよ。まあ、能力に限って言えば、俺は伍種だから超能力らしい力は使えないけども」
壁をすり抜けたのは超能力としか考えられないし、能力者ということは説明がつく。だが収容された能力者なら、こんな時間に出歩く許可が下りるはずがない。

「白銀さんに、とある提案があって、お邪魔させてもらった」
ラクは軽い調子で言うと、僕の部屋を見回した。パイプベッド、小さなテレビ、本棚、タンス、勉強机に椅子、これらが四畳ほどのこの部屋に置いてある全てだった。
肌からじわりじわりと汗がにじみ出る。シャツはそれを受け止めて、ずっしりと感じるほどに重みを持っていた。一体、これはどういう状況なのだ。
ラクの視線が一巡する。視線が僕に定まった。
「あんたは、こんな牢獄みたいな生活に嫌気がささないか？　俺は、俺は嫌なんだ」
彼の言葉の真意を確かめようと僕は見つめ返した。ラクは気にしない様子でキャップ脱ぎ、うちわ代わりにあおいだ。ツンツンした髪があらわになる。強く目をひかれる、彼の髪もまた赤、真紅に染まっていた。
ラクは帽子をタンスに置いて、壁に寄りかかった。
「しっかし、暑いな。外へ出て話そうじゃねえか」
狭い部屋に三人も集まるとかなり熱気がこもる。正直、僕も蒸し暑くてたまらない。
「この時間、部屋からの外出は許可されていないはずだ」
施設の規則は厳しかった。特に僕のように超能力の強さ『干渉力』が高いとなおさら厳重だった。この部屋なんて外からカギがかかっているくらいだ。施設内ではいたる所に監視カメラが設置されている。
「そうだな。だが、俺があんたの部屋に入るのも許可されてなかったぜ？」
ラクがニカッと笑った。その笑みはまるで小学生の悪がきのもののように幼く見えた。
「俺たちの『能力』を使えば、奴らのクソみたいな警備なんて屁でもねえのさ」
彼らは自身の超能力で、規則違反をしてここまで来ているようだ。

見つかればそれ相応の罰があるはずである。何の理由があってラクは僕の部屋まで来たのだろう。
「もう一度言う、君の目的はなんだ？」
彼のはっきりしない物言いに、僕は同じような質問を三度もする羽目になった。
「簡単な欲求さ。俺は自由が欲しいだけだ。俺たちが、自由に暮らせるような」
またもや抽象的な答えが返ってきた。僕はつい不快感をあらわにして彼を睨みつけていた。対するラクからは軽い調子が消え失せ、凛とした雰囲気を醸し出していた。
僕はその雰囲気から、彼の大きな自信というか、風格のようなものを感じ、彼に強く引き込まれていた。ラクの二つの瞳が黒く輝く。
「俺はこの腐った超能研の暮らしを変えたい。だから行動を起こす。そのためにもお前の力を借りたい。待っているだけじゃ、何も変わらないだろ？」
島がすっぽり入ってしまいそうな巨大な渦巻き、それを崖から覗き込んでいるような気分だった。見れば見るほどその偉大な景観にひきこまれ、身を乗り出してしまう。
「逆に聞く、あんたは自由がいらねえのか？　くだらねえことに縛られて満足なのか？　あんたが俺らと同じ考えなら、このしょうもねえ暮らしをぶち壊そうじゃねえか」
面白くてたまらないという様子で彼が笑う。そして、僕にゆっくりと右手を差し伸べた。なぜだか、その右手がとても魅力的に映った。気付かぬうちに彼へ手を差し伸べようとさえしていた。
彼の手をつかめば、僕の見知らぬ世界へ連れて行ってくれる、彼の後ろに道が広がっている、そんな錯覚さえ見える。それ程までに、彼の右手には尋常ではない引力があった。
「ラク、そろそろ行かないと」
突然の女性の声で僕は我に返った。ラクの後ろにいた女性が、彼の裾を引っ張っているのが見える。ラクの雰囲気にひきこまれて、

彼女のことが視界に入ってなかった。彼女は恋人へ甘えるようにラクに寄り添っていた。
「悪いな、白銀。あんま時間がないんだ。これから、集会を行うんでね」
ラクが困ったように頭をかきながら、それでいて軽い調子で言った。
（……僕は何をするつもりだったのだ）
渦に飲み込まれる寸前だった。少しでも足を踏み入れていたら、崖から転げ落ちて逆らうこともできずおぼれ死んでいたかもしれない。
「来るかい？　白銀譲。それとも、ここに、こんな部屋に留まるのか？　納得できねえもんには、立ち向かうのが道理だろう？」
彼からの情報で出る結果は一つだ。暑さで混乱していたのだろう。うつむく僕へ、ラクが再び手を差し伸べた。
急に視界が広くなったように感じていた。さっきまで意識の外だったテレビの音が耳に入る。目をつむると、『渡辺さん』が思い浮かんだ。それと同時に僕は結論を下した。
目を開けて最初に入ってきたのは小さく、そして愛らしいあのテレビだった。映画はだいぶ進んでいた。一時停止をしておくべきだった。まあ良い。流れ行くだけの現実と違い、ビデオは巻き戻すことができる。
「――僕は、僕の生活で満足しているよ。十分な自由は貰っているつもりだ」
ラクから差し伸べられた手を、握り返しはしなかった。こんな風に自由に映画が見られるこの環境。僕はそれで十分だった。一年間、不満なんて抱いたこともなかった。それに、面倒事に首をつっこんで罰を受けるのなんて僕の性に会わない。
「自由を貰っている、か。……そうか。黒西高校の頭の良いお前さんはそう考えるのか。なら、邪魔をしたな」
ラクはつまらなそうに眼を伏せた。僕の答えが期待外れだったの

か小さくため息をついた。そこには大きく失望の香りが混ざっていた。後ろを向いて女性とアイコンタクトする。
「ヒメ、それじゃあ行くか」「うん、分かった」
ヒメと呼ばれた女性が僕を値踏みするように見て微笑んだ。微笑みというよりかは、嘲笑のほうが適しているかもな、と僕は思った。彼女は栗色の髪をなびかせて僕に背を向けた。
彼女が両手で壁に触れると、壁が水のように波立った。彼女はそのまま壁を通りぬけた。彼女の『超能力』によるものか。ラクは一度こちらを振り向いて、こちらに手をあげて見せたのち、彼女の後をついて行った。
部屋には本来の住人だけが残った。招待なしの客が帰って僕は呆然と立ちすくんでいた。緊張が解けて体からどっと力が抜ける。そのままベッドへ倒れこんだ。リモコンを手に取りでＤＶＤプレイヤーとテレビの電源を落とした。
（……いったい何だったのだ）
仰向けになって天井を見つめた。あっという間の出来事で、結局『ラク』がなぜ僕のもとへ訪れたのかは分からない。一つだけ確かなことは、彼があるものを欲していること。
「……自由か」
なぜ、僕は最初に手を差し伸べられたとき握り返そうとしたのだろう。この施設『超能研』での生活に満足しているはずなのに。なぜ、彼の手は魅力的に見えたのだろう。そんなことを考えていると、無性に目が冴えてしまった。
地下のこの部屋には窓すらない。頭の中で窓を思い描く。小さな丸窓から夜空を見た。夜風に当たって涼むのは確かに魅力的だな、と僕は思った。

１．２

七月十六日（金）
僕は海にいた。砂浜で突っ立って、高校の友達が泳いでいるのを

眺めていた。皆は僕のことなんて気づいていないようだ。だんだんと足が砂に埋もれ、僕は動けなくなっていた。僕はずっと、波の音だけに耳を澄ましていた。

そこへ、けたたましい電子音が鳴り響く。波の音は消え失せ、友人たちも海に溶けていく。僕はどんどんと、砂浜に吸い込まれ……。

「うー」

手を伸ばして目覚まし時計を止める。久しぶりに夢を見ていたらしい。ひどく寝汗をかいていた。枕元に置いてある目覚まし時計を見る。六時十七分だ。六時半から日課の検査がある。超能研では朝から晩までのスケジュールが決まっており、それに沿って時が進んでいく。

「あれは……夢じゃないようだ」

タンスの上の赤いキャップが目に入る。昨日のお客様の忘れ物だ。

寝汗をシャワーで洗い流し、ドライヤーで髪を乾かしていた。この後、渡辺さんに会うのだからしっかりと整えよう。ストライキを起こす髪たちを必死に押さえこんでいるとチャイムが鳴った。もう所定の時間になっていたらしい。急いで用意をすませねなければ。

『白銀くん。検査の時間ですよー』

スピーカーから若い女性の声が聞こえる。僕を担当している研究員の渡辺さんのものだ。

「ちょっと待ってください。すぐ行きます」

インターホンに向かって声をかける。制服の灰色のスラックスははいていたが、まだ上は裸だ。急いでワイシャツを羽織る。頭は生乾きだが髪たちを説得しきる時間はなさそうだ。僕は急いで用意を終えて玄関に向かった。

扉を開けて廊下に頭を出す。渡辺さんがすぐ横で待っていた。彼女はいつも通りの白衣姿で、両手でクリップファイルを抱えていた。

渡辺さんは女性にしては背が高かった。すらっとしていて、僕より少し小さいくらいだ。年は聞いたことないが大学院出てすぐなの

で二十代中盤くらいだろう。セルフレームのメガネをかけ、黒い髪を後ろでまとめていた。初対面の印象は仕事のできるお姉さんという感じだったけれど、実際は結構抜けているとこがある人だった。

「そこまで急がなくても大丈夫だったのに」

微笑みながら渡辺さんが言った。その笑みだけで、彼女のほんわかした人柄が伝わる。

「いえ。待たせてしまって申し訳ないです。行きましょう」

僕は平静を装って靴を履き、ドアを閉めた。一歩踏み出しても渡辺さんは立ったままだった。僕が振り返ると、彼女は僕の胸元に手を伸ばした。

「ちゃんとボタン閉めてくださいね」

急いでいたせいで第三ボタンまで空いていたようだ。彼女の綺麗な細長い指が僕のボタンをかける。まるで地響きのように、胸の鼓動が大きく体全体に響く。

「すみません」

僕は照れのあまり石のように固まった。そんな様子を見て、渡辺さんはくすくすと笑った。

「なんだか、朝から謝ってばかりですね。……じゃあ行きましょうか」

渡辺さんがゆったりとした歩調で歩き始めた。部屋から出て直ぐの廊下の壁と床は、室内と同じでコンクリートでできていた。彼女の爽やかな香りが鼻をくすぐる。それが唯一、無機質な空間を和ませてくれていた。

僕の部屋は、超能力者研究施設、『超能研』の中央研究棟の地下三階にあった。超能研へ収容されたほとんどの能力者は研究棟の左右に建てられた寮棟で暮らしているらしい。僕のように『干渉力』が高いと検査に重みが置かれるので、管理しやすいように研究棟の地下に回されるそうだ。不確定な情報ばかりだな、全く。

施設では、『干渉力』という超能力の強さで、能力者を五つに区分けしていた。最も能力の高いグループが『壱種』と分類され、と

ても数が少なく日本国内に十人もいないそうだ。僕は国内に二十人ほどいる『弐種』に分類されていた。そう考えると、とても希少な人材なのだろう。そんな自覚はないけれども。

世間話をしながら廊下を歩く。話に夢中になっていて、すぐに廊下の突き当りのエレベータに着いた。渡辺さんの隣にいると時間が加速しているように感じてしまう。

「でも白銀君が用意を遅れるのは珍しいですね」

渡辺さんがエレベータの上りのボタンを押した。

「そうです、かね」

エレベータを待っている間、僕は昨日の赤髪の客人のことを思い出していた。渡辺さんに彼らついて報告すべきだろうか。僕の一言で彼らが重い罰を受ける可能性もある。そう考えると直ぐには言葉が出てこなかった。

「そういえば昨日の映画はどうでした？」

言いよどんでいる僕に気を使ったのだろう。渡辺さんが尋ねた。彼女に頼んで定期的に映画のＤＶＤを持って来てもらっていた。借りた翌朝に感想を聞かれるのが日課だった。

「最後まで観てないんですよ。蒸し暑くて、全然、集中して見られなかったので」

「そうなんですか。昨日は特に暑かったものね」

そんな話をしていると、エレベータが到着した。なんとなく言うタイミングを逃して、とうとう『ラク』について話を切り出せなかった。

エレベータが研究棟の五階についた。コンクリートの壁から打って変わって、白いタイル張りの広い廊下が広がる。僕らはいつも通りにまっすぐ検査室へ向かった。検査室は広く、大きな機材が所狭しと置いてあった。その全てが真っ白で、目がチカチカする。

幼児の頃から潔癖すぎる環境にいると、成長してから雑菌などに耐性がなくなってしまう。そんなことを聞いたことがある。そもそ

も人間は多少汚れているものだし、過ぎたる清潔は自らを削ぐものなのかもしれない。この施設の白さは、時々毒に感じる。
ふと幼い頃の記憶が顔を出した。両親は悪影響だと判断したものを全て隔離し僕を育ててきた。小さい頃はゲームや漫画、娯楽とは無縁の生活だった。友達の話についていけなかった頃を思い出していると、小さな寂しさが胸を苦しめた。
「じゃあ、着替えておいてね」
渡辺さんに病院で着るような水色の診察着を手渡された。感傷に浸っている時間じゃないな。わざわざ更衣室に行くのも面倒なので、僕はいつものように機材の裏で着替えた。
「着替え終わりましたか？」
「あー、はい」
渡辺さんから声がかかる。僕はえりを整えて、マッサージチェアーのような、歯医者で使われるような椅子に座った。これは心拍数やら体温やら、もろもろの数値を数分で一度に測れる機械のようだ。目をつむり深く寄りかかった。こうして朝の検査が始まった。
僕はここで毎日三回、朝昼晩と『超能力』の検査を行っていた。頭に変な電極をつけたり、体中にコードをつけたり、大きな筒に入ってスキャンされたり、三十分くらいかけて体の隅々を調べられる。実験に使われるカエルの気分だ。退屈ではあるが、苦痛はない。無意志に気になろう。そうすれば直ぐ終わる。ちょうどいい、眠気と遊んでこよう。

最後の検査であるベッド上での全身スキャンが終わった。体を起して隣で立っている渡辺さんを見ると、ペンを唇に当ててなんだか悩んでいるようだった。
「んー」
「何か変な数値でも出ました？」
「いいえ！　いつも通りですよ？」
渡辺さんは気付かぬうちに声を漏らしていたようで、慌てた様子

で言い返した。
「……進展がない、ってことですね」
僕はそう呟いて天井を見上げた。睡眠不足でまぶたが勝手に下がって行く。うつろになっていく意識の中で、八年前のニュース映像が鮮明に再生されていった。
今から八年前、当時の科学では説明できないような異常現象が世界中で多発していた。現代オブジェのようにひん曲がったガードレールが発見され、甲子園で打たれたボールが空中で静止した。そんな事柄がテレビのワイドショーを賑わしていた。
その現象に対して、大学の偉い教授たちが集まって結論を出した。それは十代の少年少女の『超能力』によって行われたものとの事だと。
僕は大きくあくびをして体を伸ばした。そこで部屋がやけに静かなことに気づいて渡辺さんの方へと振りむいた。彼女は深く頭を垂れていた。
「あの、すみません。研究に進展がなくて」
弱々しい声で彼女が言った。僕はそこで失言に気づいた。進展がない、と言ったことに研究者の彼女が責任を感じているのだろう。とりあえず口を開いたものの、寝ぼけた頭では的確なフォローが思い浮かばない。
「そんな！　渡辺さんが謝らないでくださいよ！　そういうつもりで言ったわけじゃ……」
渡辺さんは顔を上げて、不安げに僕を見つめてきた。
「白銀君は、……ここから、『超能研』出たいんですか？」
渡辺さんの質問で、僕の意識がはっきりと目覚める。超能研、正式名称は『国立超状現象発動能力所持者研究機関』だそうだ。
教授たちの研究を、そして『超能力者』という概念を、政府は認めた。そして超能力解明のために、東京都内二十三区外のとある山を買い取った。その頂上に馬鹿でかい研究施設『超能研』を建てたのだった。

「僕はこの生活に満足しています」
今の自分の言葉では、質問の答えになっていないことが分かっていた。監獄のような暮らし、誰かの言葉が僕を非難する。言い訳するように出た言葉はこれだけだった。
渡辺さんが申し訳なさそうに、うつむきながら口を開いた。
「超能力が使える限り、超能研からは出られないように法律で決められていますからね」
ちょうどそれぐらいの頃から学校で身体測定とともに超能力の検査を行われるようになった。そこで超能力者と診断された者は法律によって『超能研』で生活するように定められていた。日本全国の能力者がここ超能研に集まっていた。
「そうですね。まあ仕方ないことだと、僕も思います」
超能力者を束縛する、僕はその法律に不満など抱いてはいない。実際、理解不能な力は危険だし、そのための対処・研究は必要だ。それに一生閉じ込められているわけではない。
「ほとんどの人は十代を過ぎると能力が使えなくなるらしいし、もう数年我慢しますよ」
僕が喋っている途中で、渡辺さんが勢いよく顔を上げた。僕を見つめる彼女の瞳から燃えるような強い意志を感じる。
「ごめんなさい。でも必ず、解明してみせます。直ぐにとは言えないし、曖昧で申し訳ないけど。必ず」
渡辺さんはネガティブな感情を反転してやる気に変えられる、そんな強い人だった。だから僕は彼女を尊敬していた。入って直ぐの閉じ込められて苛立っていた僕を助けてくれた。、彼女と話すことはいつも僕の救いになる。
「……まあ、今の生活も、毎日、渡辺さんと会えるのでいいです」
見つめられるのが照れくさくなって目をそらし、冗談めかして呟いた。横眼で渡辺さんを見ると、豆鉄砲を食らった鳩のようにきょとんとしていた。
広い部屋に静寂が広がる。間をおかれて凄く恥ずかしくなってき

た。何を口走ったのだ僕は。ああ、くそう、悔やんでも一度口から巣立った言葉はノドまで戻ってこない。
冷房が効いているはずなのに、血液が沸騰したように暑い。心臓が無駄に頑張ってくれているのか、胸の鼓動が嫌に速い。僕は気付かぬうちに渡辺さんを正視していた。彼女がゆっくりとうつむく。
「……ぐはっ！」
渡辺さんが、うつむいたままクリップファイルで僕の脇腹を突いた。ちょうど骨の間に入って、僕は思わずのけぞった。
「もう、そんなこと言って。大人をからかわないの！」
渡辺さんは、照れくさそうに、はにかんで僕を見た。僕も笑いたかったがわき腹の痛みでつい顔が引きつってしまう。
渡辺さんがニコニコしているのは大変よろしいことだが、ある事に全く気付いていない。
「あ、あの」「……はい？」
渡辺さんは、首をかしげて聞き返した。
「プリントが、その散らかってしまいました」
「わっ、本当だ！　うわー、どうしよ！」
僕に突きを食らわせた勢いでファイルのクリップが外れてしまったようで、十数枚の書類が床に散らばっていた。僕はベッドから降りて、あたふたと回収している渡辺さんを手伝った。そんなに枚数があるわけでもなく、ばらまかれた書類はすぐに集まった。
「ごめんね、手伝わせちゃって。ええと、あと一枚だけあるはずなんだけど……」
「この機械の下にありそうですね」
ベッドのすぐ近くの業務用コピー機のような機器を指さした。しゃがんで機械の下の隙間をのぞいてみたが、暗くて何も見えない。とりあえず、体勢を戻そうと顔を上げた。
「どうですか？」
渡辺さんに耳元でささやかれて胸が高鳴る。すぐ目の前に渡辺さんの横顔があった。僕はその精巧な飴細工のように繊細な長いまつ

毛に見とれて息をのんだ。
激しい鼓動を気づかれないように、僕は距離をとった。不意に近づかれると心臓に悪い。
「……僕の『力』を使ってみますね」
さて、『超能力』を使うことにしよう。超能力者はそれぞれ異なる超状現象を起こすことができた、と今更説明することでもないかもしれない。僕の場合は、念じることで光を操作する「光線操作」という力を持っていた。分かり易いようにつけられた愛称は《ライター》だ。
瞳を閉じて眉間に意識を集中する。光の粒子が指先へと集まるように強くイメージする。超能力者はを力を使う際に集中しやすいように、特定の構えをすることが多いそうだ。僕は右手で鼻のてっぺんを触れるのがそれに当たるのだろう。
目を開くと右手の人差指から一直線に光が伸びていた。《ライター》と名が示すように、僕の能力は懐中電灯がわりにしかならない。部屋の光をレンズのようにして集めているらしい。
「ああ、見つかりました。」
機械の下に手を伸ばしてプリントを取った。緊張の糸を緩めると指からの光が消えた。ごく自然に超能力を使っている自分に気付いて苦笑した。原理がまるで判明していない力、そんな特殊な力を、こんなにも平凡な僕が使っているなんて。
国規模の労力を払い、七年経とうとも未だ『超能力』は解明されていなかったのだ
「どうぞ」
手に持ったプリントの埃をはたいて、渡辺さんに差し出す。
「白銀君も埃だらけになっちゃいましたね。ごめんね。ありがとう」
渡辺さんはそういうと、背伸びをして僕の頭をぽんぽん叩いた。いつも思うが、こういう渡辺さんの僕への所動作がなんとも歯がゆい。
「自分でやりますよ」

渡辺さんの手が汚れるのも嫌だし、僕は乱暴に自分の頭をはらった。
「あっ、ごめんなさい。嫌だった？」
眉をハの字にして彼女が尋ねる。その問いは卑怯な気がする。僕個人としては、まったくもって嫌ではないのは確実で、絶対なのだけれど。
「なんだか、実家の弟を思い出して、つい……ね？　不快だったら、ごめんなさい。」
その一言が僕の心を暗く濁らせた。一見すると清らかな川、その底がかきまわされヘドロが汚く舞い踊り、水を黒く染めたようだった。
渡辺さんが僕をどう思っているのかは理解しているつもりだ。それでもはっきりと言葉にされると大きく心が揺さぶられる。僕はぎこちなく微笑むことしでしか返せなかった。
彼女から視線を外し、壁に掛けられた時計を見た。もう七時を過ぎていた。
「渡辺さん。もう検査の時間は終わってしまっていますけど」
「わっ、本当、もうこんな時間！　早く片付けて、朝ご飯にしなきゃ」
渡辺さんはプリントをファイルに挟むと、いそいそと機器の電源を落としていった。僕はその間に超能研の制服に着替えた。昨日の来訪者と同じ、シャツにスラックスである。一通り後片付けを終えると、僕たちは検査室を後にした。
僕たちは早歩きで、研究棟七階の食堂へと向かった。朝食の時間は八時までと決まっている。移動や食事の時間を考えると、そんなに余裕がない。
「今日は手伝ってもらったし、ごちそうしますよ」
「……寮食だから関係なくないですか？」
「気持ちだけでも！」
「何ですかそれ」

渡辺さんは、こちらに体を向けて両手でガッツポーズをとって、にっこり微笑んだ。
その笑みで僕の心は落ち着きを取り戻していった。濁りはまた底へ沈殿していった。でも分かっている。それが消えたわけじゃないということを。

1．3

「いっただっきまーす」「いただきます」
僕と渡辺さんは研究棟の食堂で向かい合って座っていた。渡辺さんの都合もあって、二人でご飯を食べることは滅多にないことだ。朝から気分が弾む。
「朝はやっぱり和食ですよね」
朝食の献立が気に入ったのか、渡辺さんは上機嫌だった。今日の朝食は、ご飯、味噌汁、焼き魚、漬物、それと納豆のようだ。僕の側にも同じものが並ぶ。
「やっぱ朝は納豆を食べないとダメです。頭が目覚めません」
彼女はそう言うと、パック内の納豆をかき混ぜた。音を立てないように、箸で少しずつ摘まんで口へふくんでいった。
周りを見回すと、僕と同年代の人たち数人が集まって食事していた。参種以下は寮棟で食事と決まっているそうだし、僕と同じ弐種の人なのだろう。超能力者といっても、特殊な人は見当たらない。研究員と食事しているのは僕ぐらいかな、と無駄な優越感に浸る。
もう少しで食べ終える頃に、渡辺さんから声がかかった。
「白銀君、友達できました？」
「んー。一人は。かと言って、遊ぶこともないですけど」
僕は苦笑して答えた。施設内でも臨時の教育部門があり、つまるところ超能研の中に学校があった。毎日、朝九時から夕方の六時まで休憩をはさみつつ、八名のクラスで授業を受けていた。一年も過ごして出来た友人は一人だったが不満はない。
「そうだよね。そんなに時間もないものね」

彼女のせいではないのに、渡辺さんは自らに非があるように申し訳なさそうに言った。一応夜の八時半からは自由時間になっている。だが個室からの外出は禁止されているので、結局は友人である拓馬と遊ぶ時間など無いに等しい。

「やっぱり、夜に出歩くのは無理なのですよね？」

「うん。私もきちんとした用がない限り、部屋へ出るのは禁止されているし。……お腹すいた時なんて困っちゃうもの」

僕の頭に赤い帽子をかぶった青年が思い浮かぶ。食べながら喋るのは良くないとは思いつつ、僕は浮かんだ疑問を素直に尋ねていた。

「もし、出たとして、罰則とかあるのですか？」

渡辺さんは納豆を食べ終えて、プラスチックの容器をどかした。

「……ん？　なんか悪いこと考えていませんか？　白銀君」

眉間を寄せて渡辺さんが尋ねた。何か勘違いされているようだ。

「いえいえ！　何もないですよ。はい。……うおっ」

僕が焦って訂正していると、後ろから肩を強く掴まれた。なんとなく湿っぽい熱気を感じて振り向くと、岩のようにごつごつした手が見えた。すぐ後ろにある男が立っていた。

その像を捉えた瞬間、生き生きとしていた心が直ぐにしおれた。岩瀬だ。朝からこいつと会うなんて不幸以外のなにものでもない。

「おはよう！　渡辺！」

岩瀬が渡辺さんに向かって朝の挨拶をした。ギトギトした背脂に占領されたスープのせいで味のバランスが崩壊したラーメンのごとき笑顔がとてもむさ苦しい。

岩瀬、下の名前は知らない。性別は男。三十代の体育教師であり、逆三角形肌色黒、とっても毛深い。研究員としてではなく超能研内の教育部門で体育教師をしていた。僕の想像する体育会系の悪いとこを寄せ集めた人間そのもので、たいそう苦手だ。渡辺さんを呼び捨てするのも、なんだか気に食わない。

「……いててっ」

「ちょっと、岩瀬さん！　白銀君に何しているんですか！」

岩瀬が僕の頭を両手のげんこつで挟んで、ぐりぐりと動かしていた。いきなり何だ。
「女性の前で納豆食べるなんてデリカシーがないぞ。お前！」
岩瀬は得意げな顔をして、渡辺さんが食べた納豆の容器を指さした。
「それ、私が食べたんですけど」
「……」岩瀬の顔が固まる。奴はゆっくりとこちらへ向いて、なぜか僕を睨みつけてきた。いい加減、僕の後ろから離れてくれないだろうか。近くにいるだけでうっとうしい。
「ほら、お前はもう授業始まる時間だろ。早く行け」
「……はい」
どうやら奴も邪魔ものに早く去って欲しかっていたようだ。心の中で深く溜息をついた。教師と生徒の関係だ。下手に議論して面倒なことになるのは避けよう。
岩瀬とは体育の授業以外に顔を合わせる機会は少ないはずだった。それなのに、ほぼ毎日嫌になるほど奴と会っていた。それは、岩瀬が僕の担当研究員である渡辺さんに会いに来ているから、だった。
「もっとしっかり返事しろ！　男だろ！　それとも文句でもあるのか？」
「いえ。ないです」　岩瀬への文句を言いだしたらそれだけで一日が終わってしまう。
「これだから最近の男は困りますよね。なよなよして」
僕が岩瀬のことを良く思ってないように、岩瀬も僕のことを良く思ってないようだ。体育の授業中も、あからさまに僕だけ目の敵にするし。
「そうですかね。白銀君はきちんとしていると思いますよ」
渡辺さんがそう言って、笑顔をこちらに向けてくれる。それだけで今日一日頑張れそうだ。
「いえっ！　男はやはり頼りがいがないとだめです。男は運動ができないとね。俺がこいつらくらいの年の時、全国大会で競った相手

はみな目が輝いていた。それに比べて……」
「……はぁ。すごいですね」
いつものように岩瀬の自慢話が始まった。この状態で渡辺さんを置いて行くのは大変心苦しい。だが、朝の授業の時間が迫っているのは確かだし、僕は行かなければならない。
「それでは。渡辺さん、先に失礼します」僕は食器が乗ったお盆を持って立ち上がった。
「うん。また後で。私も直ぐに研究室に行かなくちゃ。今日のデータを検証してみますね」
渡辺さんが手を振ってくれた。そうして僕は二人に背を向けた。
また昼の検査で彼女とは会える、そう自分に言い聞かせた。背中越しに聞こえた二人の会話へは耳を傾けないようにした。

1．4

「今日はそこまで暑くないから、映画も観られそうですね。次に借りたいのがあったら、早めに言ってね」
「今はこれといって観たいものないのですよね。何か渡辺さんのお勧めがあれば」
授業を終えて、夕食後の夜の検査を終えたところだった。日も落ちた午後八時だ。僕は渡辺さんと検査室を出て、並んで廊下を歩いていた。しばらく歩くと不快極まりないものが視界に介入してきた。エレベータ前で岩瀬が立っていたのだ。
「よっ、渡辺。じゃあ行こうか」
「……はい？」
岩瀬が笑顔で渡辺さんへと手を差し伸べ得る。対する渡辺さんは首をかしげていた。
「朝、一緒にディナーをと約束したじゃないか」
「えっ、今日のことだったんですか？」
僕は無言で二人の会話を聞いていた。右耳から入った内容はそのまま左耳から押し出したかった。だが僕の頭はしっかりとその単語

を受け取り並べ、会話の内容を理解させた。
「そうだよ！　調理のおばさんに頼んで特別メニューを用意して貰ってるんだぜ」
「……はあ。それじゃあ、行かなくちゃ悪いですね」
「おうよっ！！」
岩瀬はそう言って、エレベータの上行きボタンを押した。それと同時に電子音が鳴る。もうこの階についていたようだ。岩瀬が渡辺さんの手を引いて二人は中に入った。
「ごめんね白銀君、部屋まで一緒に行けないで。また明日の朝に。……じゃあ、お休み」
「はい」僕の口から出たのはその一言だけだった。にやけ顔した岩瀬と目が合う。黄色く染まった歯、手入れされていない無精ひげ、だらしなく膨らんだ眼の下の肉。一秒もせずにエレベータの扉が閉まったというのに、岩瀬の顔だけは脳裏に焼き付いて離れなかった。
僕は呆然と下行きのボタンを押した。さっきと違ってエレベータが来るまでに、だいぶ時間がかかった気がする。
エレベータが地下三階に着いた。個室までの廊下がとてもとても長く感じた。渡辺さんが隣にいる時は瞬きするほどの間に着く距離だったのに。
いやな想像が頭にこびりついて、ぬぐい切れない。衝動に任せて廊下の壁でも蹴り飛ばしたかった。だが至る所に設置されている監視カメラの目を気にして行動には移せなかった。
部屋まで胸が苦しくてたまらなかった。胸の中のドロドロとした何かが、心臓を強く握りしめているかのようだった。我ながら女々しい嫉妬だ。奴にあんな風に言われても仕方ないのかもしれない。頭の中ですら、逆三角形の名前など出したくもない。
部屋の前に着いた。ポケットから身分証明証カードをだして、扉横の機械に通した。ロックが解除され扉を開く。誰も待つ者のいない自分の部屋へと足を踏み入れた。

扉についている郵便受けに手紙が入っていた。封筒と絵葉書が一枚ずつ無造作に置いてある。この郵便物が少しでも滅入った気分を紛らわしてくれることを願おう。つかみとってベッドに寝ころぶ。絵葉書は高校の友人から、封筒は親からのものだった。

絵葉書の写真は、友人三人が体操服姿で肩を組んで並んでいるものだ。つい最近行われた高校の体育祭の時に撮ったものだろう。写真の上には黒のサインペンで文字が書かれていた。

『我等ガ一組、無事優勝！　白銀ノ帰リヲ待ツ！　ソシテ約束ノ海エ行コウ！　コマル、ケンゾウ、チュウスケ』

ここへ来る前に、彼らと海へ行く約束をしていた。すっかり頭の片隅へ追いやられていたようだ。もう直ぐそこまで夏は迫っていた。それまでに僕はここから出られるのだろうか。多分無理だな、と僕は答えた。

封筒を手にとり封を開けた。いつものように母さんの手紙だった。超能研では携帯電話の持ち込みが禁止されているので、母さんはいつも手書きの手紙を送ってくれていた。

あお向けになって手紙に目を通す。インテリな両親が心配しているのは教育環境のことだけのようだ。僕が進学校黒西高校を選んだのも両親の計画に則ったものだ。超能力に覚醒し、その予定が狂わされたのが相当に悔しいのだろう。文字からまるでオーラが花たれているようにひしひしと伝わってくる。

ふと、おまけのようにとってつけられた一文が目にとまった。

『今年も、山梨のおじいちゃんの所へ行けると良いわね』

目をつむると、田舎の祖父の家が鮮明に再生された。耳を塞ぎたくなるような蝉の鳴き声、灼熱の熱気の中でさせられる草むしり、祖父母に歓迎されすぎるのが少し気恥ずかしく、そしてなにより億劫だった。毎年行くたびに早く東京に帰りたいと思っていた。それなのに、それなのに今はその土の臭いが何故かとても魅力的に感じた。

この先どうなるのだろう。僕がいつまで超能研にいるかは能力の

数値が国の基準を満たすかどうかで決まる。制御できぬ数値だけの問題であり、僕にはどうすることもできない。結局はなるようにしかならない。

「……逆効果だったかな」深くため息をついた。郵便物二枚をのけて枕に顔をうずめた。

この先どうなるのか、未来が落とす影を捉えることが出来れば傷つかない様に予防線を張れるのかもしれない。だがその未来に希望がなければ過ごす日々はただ絶望だけになってしまう。

ならば何も考えず、おうおうと生活を送った方が疲れないで済む。僕はそうすべきなのだ。

――友人たちは僕を置いて海に行くだろう。そして彼らは夏を満喫する

――今年は父と母二人だけで里帰りするのだろうか。だからといって何も変わるまい

――その間、僕はこの施設に閉じこもって、淡々と時間を潰す。世間は変わらない。僕がいようとなかろうと

二つの光景が頭にこびりついて離れない。未来の影など捉えたくもなかった。だが近い未来の影は僕にすでに落ちていた。認識せざるをえなかった。

これは仕方がないことなのだ。僕が超能力を持っている限り、自由を束縛されなかればならない。僕は影を振り払うために必死に己へ言い聞かせた。

――なぜ、そう思いこまなければならないのだ？　何故！？

一つの疑問が頭を敷き詰める。第三者の視点での僕の超能研での生活が流れ込む。

狭い部屋でテレビに向かうことしかできない。一日の半分以上のスケジュールが定められている。ＤＶＤを渡されたくらいで自由だとほざいている。白銀譲が滑稽に思えて仕方なかった。いつまで続くか分からない束縛された生活を、自由だと胸を張って言っている。

『私もきちんとした用がない限り、部屋へ出られないくらいだし』

渡辺さんはそう言った。それは、僕への慰めだったのだろうか。
そう、彼女は岩瀬と自由に時間を過ごすのだ。
渡辺さんがいるからいい、僕はそう言った、あの言葉に嘘はなかったのだろうか。

僕は気付いた。
僕は渡辺さんに会うことで、この堕落した生活への不満を忘れようとしていた
僕は何も行動しない言い訳に、彼女を使っていた。彼女がいるからココにいると
僕はそれだけに耐えてなどいられない。一方的に思い続けても虚しさが募るだけだ
僕が求めるものは別にあるはずだ。でも、そんなものすら分からなくなってしまった

――僕の胸の心は渇ききって大きな『穴』が出来てしまっている、それが今分かった

昨日の訪問、今日の出来事、どれがきっかけでこう感じる様になったのかは分からない。その全てが引き金になったのかもしれない。
ずいぶん前に出来たこの『穴』は、どんどんと心を乾かせて広がっていく。僕の生活から彩りを亡くしていく。そして、いつしかそれが当然になっていく。
未来の黒い影が世界を包む。視界が、世界が、モノクロに変わる。全てがコンクリートのように無機質でぬくもりも何もない。その中で唯一色鮮やかな色をした物が目に入る。鮮やかな赤色をしたものが。
「……自由か」
箪笥の上にある赤い帽子、それを見るだけで僕の心の中がざわめきだす。ラクが手を差し出した時、その時すでに彼の手が魅力的に

見えた理由も分かっていた。僕は必死に誤魔化していただけだ。
心の『穴』が何なのか分からない。でもこの部屋から出れば、それが分かる気がする。埋める方法も外にある、そう思う。そうすればこの暗い未来は替えられるかもしれない。
僕はここへ来て初めて、部屋から出たくなっていた。

1．5

強く望めば叶う、そんなことは物語の中だけだと思っていた。灰かむりの娘を魔女が助けたような、そんな運命的な幸運はあり得ない、そう思っていた。だが僕にも救いの手が差し出された。心の『穴』を埋める、その絶好の機会が。
「よお。お休みのとこ悪いね」
僕がベッドで寝転んでいると、昨晩と同じように壁をすり抜けて赤毛の男が入ってきた。相変わらずアポイントなしで、こちらの予定など意にしない男だ。だが今日ばかりはそれも悪くない。
「ノックぐらいしたらどうだ」
「ノックってのは便所の扉にするもんだろ？　ヒメの能力を使っちまうと壁が液状になるから無理なんだよ」
僕は彼らを客として対応する気もなく、寝転んだまま対応した。自分でも気付かぬうちに僕の頬は緩んでいた。現状打破への義務感と焦燥感が混ざりあい、時には反発しあった。興奮していたのに、不思議と心の底は落ち着いていた。
ラクが目を細めて僕を睨む。僕の様子を不審がっているようだ。
「おじゃましまーす」「……」
後ろから二人の女性がついてきた。昨晩来た『ヒメ』と呼ばれた人と初対面の女子だった。
彼女は中学生だろうか、僕より二、三歳は幼く見えた。外にはねた癖っ毛を肩くらいまで伸ばしていた。明るい髪色もあわさって、どことなく猫っぽいな。
ラクが後ろの二人に手を向け、止まれと合図をする。僕は帽子へ

と指をさした。
「君の忘れ物なら、そのままだ」
「おう。妹の部屋が近くなもんで、会うついでに取りに来た」
この女子はラクの妹か。鋭い目つきには、確かに彼の面影が見える。ラクは帽子をてにとり僕に背を向けた。去ろうとしたラクの姿を見た瞬間、彼へ言葉を投げかけていた。
「君はこれから集会なのか？」
「いいや、終わった帰り道だ」
「……そうか」
僕の一言に、ラクが振り返る。彼は壁際から、僕の居るベッドの方へと歩み寄った。それを見て僕は体を上げてベッドに腰かけた。彼は目の前で床に腰を下ろし、あぐらをかいた。まるで密談するかのように、顔を近づけてラクが口を開いた。
「どうした、シロガネジョー。気でも変ったか？」
「……君が求める自由とは何なんだ？」
「あぁ？　なんだいきなり。簡単だろ？　当たり前のことが当然であることさ」
「……なるほど。僕も、当然のことが出来ない、この生活に不満がたまっていたようでね」
僕の言葉を聞いて、ラクは軽薄に、へらへらと笑った。いつもなら、僕はそんな態度を取られたら不快に感じるだろう。だが、今の僕はむしろ愉快だった。つられて笑うほどに。
ラクのそれが移ったように、今度は後ろの女性たちが不審な表情に変わる。
僕は心を決めて、彼に自分の確かな意思を告げた。
「ラク、僕もここの生活を壊したいと考えている。一度断っておいてなんだが、君の集会に参加させて貰えないだろうか？」
「俺らの仲間になるってことでいいのか？」
お互いの笑みが消え去る。部屋に沈黙が広がる。
「……そう決めてはいない。無礼なことは謝る。僕は君が何をして

いるか知りたい」
　ラクはふき出して、ケラケラと笑い始めた。
「はっ、不思議なやつだな。シロガネジョー」
　彼はベッドへ僕と並んで座り、肩をばんばんと叩いた。面白くてたまらないという様子で、彼は笑い続けた。ここまで笑われると、流石に居心地が悪い。つい嫌味を言ってしまう。
「君に言われたくないな」
――僕はラクを信用したわけではなかった。会って直ぐに信頼できるはずなどなかった。
「くくく。そうこなくっちゃあ！　やっぱ、最初に会ったときから白銀の目は違ったからな」
　ラクが小学生のように無邪気に笑う。僕は冷たい目で彼を見つめた。
――僕は、この胸の『穴』を埋めたい。ぽかりと空いた空虚なものを。行動を起こさなければその穴は広がっていく、そんな恐怖が僕を動かす。
「来るなら来い！　無礼も何もねえ！　目的が同じならば、誰も拒まねえ！　それが俺たちのグループ『エスエス』だからな！」
　ラクはそう言うと、僕へ手を差し出した。昨晩と同じように。僕はそれを握り返した。
「ようこそ、白銀譲」
「とりあえず、よろしく。ラク」
――握る手は、『僕の心』そのためだけに。
　夏の小部屋に四人が集う。二人の影は一つに重なる。僕の、白銀譲の高校二年生の夏が始まった。
　僕も、僕の道を切り開いてやろうじゃないか。

2. 正体

2. 1

――よお、白銀。邪魔するぞ

ラクの来訪はいつも突然だった。彼の行動は自由そのものに見えた。でも、そんな彼のおかげで僕は考えを改めることが出来た

超能研では月曜日に朝会がある。その時は僕の住んでいる研究棟裏の屋外運動場で三百名ほどの能力者が集結する。壱種の能力者は別の場所で行っているらしいけれど。エキセントリックな人たちが集まってるのを想像するかもしれないが、平凡な学生が並んでいるだけだ。

干渉力、学年によって授業のクラスと同じように区分けされていた。僕の周りは干渉力弐種、高等学校二年生がそろい、クラスメイトはたった八人しかいない。

――次の朝会でツラ合わせだ。所長が話し始めたらこれから言う場所に来てくれ

ラクが来訪してから土日を経て三日が経っていた。あの晩に彼はこう言った。それは朝会をさぼるということで、もし見つかったらある程度の処罰が下るだろう。

今回は、僕が自主的に違反行為をするということだ。ここ超能研に来てから、というより生まれてこの方、自から規則を破ったことなどなかった。慣れないことをするのはとても気が重い。

なかなか会が始まらないので、私語が大きくなってきた。土日は毎週授業がないこともあり、出てくる言葉は普通の学生と同じく月曜日を呪うものばかり。前に立っていた男もしびれを切らしたようで、こちらへ振り向いた。

「なあ銀ちゃん。夜に外出しているやつらの噂聞いたことある？」

この青年からの言葉で、僕は傍目で分かるほどには動揺したと思

う。
「何のことだ？」
声を荒げず平常を装う。状況を把握しなくては。眼前の男の顔を捉える。
肩まで伸びた髪をヘアバンドで止め、ひたいを露わにしている。彼の名は富永拓馬、超能研で唯一存在する僕の友人である。背は僕より少し高くて体格は良い。だが常にへらへらしており、威圧感なんてかけらもない。
彼が言っているのはラク達のことだろうか。生徒の噂になるようでは警備員たちからも目がついているだろう。僕にも疑いの目が向かうかもしれない。それなのにみすみすと彼らの企てに加るのはまずい気がする。
「どこで聞いたのだ、そんなこと？」
相変わらずしまりのない顔をしている拓馬に訪ねる。見る限り顔の各々のパーツは整っている。それなのにパーツをつなぐ頬やら肉が緩みきっていて、美形という印象をまるで受けない。まったくもって残念なイケメンだ。
「つうか、うちが見たんだ。先週の夜に、あまりの暑さにぶっ倒れちゃった。そこで運び出されるとき、明らかに制服着た男が何食わぬ顔で外にいたんさー」
わざとらしく眉間にしわを寄せる拓馬。ゆるんだ肉のせいか、しわはとっても薄い。
「顔は見たか？」
「暗くて見えなかったんだよ。職員に言った方が良いかな？」
ラクたちはどうやって移動しているのだろう。壁を通過できようと監視カメラの目をかいくぐるのは不可能なはずだ。とりあえず拓馬の話を自分に都合の良い方へと誘導しておこう。
「……言わない方がいい。下手にそいつに仕返しされても困るだろう？　見間違いかもしれないだろうし」
「そうかもなあ。くわばら、くわばら。確かに抜け出すような悪の

八つ当たりは怖い。触らぬ悪に復しゅうは無し。よってたかってリンチにするんだろうなあ。こえー」
何気なく拓馬が言った『悪』という単語が釣り針のように胸に引っかかる。刺さっているだけで痛むのに、抜こうと、忘れようとすると更なる痛みが襲ってくる。
「うちらはこの生活で我慢してるのに、規則を破るなんて迷惑なやつだよなあ。ったく。あー、やっぱ一度悪いことしだすと、どつぼにはまるのかねー」
「……そうかもな」
何かを始めた。そんな気持ちだけがあった。僕は心の『穴』を埋めるために行動を始めた。この後、僕は規則を破る。その覚悟はできているのか。本当にこんなことをする必要があるのだろうか。
「ん。どったの銀ちゃん？　青い顔してるよ？」
拓馬が心配そうに僕を見たが、すでに僕の注意の外だった。一度でも悪いことをすれば今まで白かったものは黒く汚れてしまう。どう洗っても多分それはもう二度と白には戻らない。急に罪への恐れを感じ始めた。
朝会が始まっても僕は上の空だった。もやもやして、どうしてもすっきりしない。時は無機質に流れ、ラクと約束した時間へ着実と近づいていく。止められるわけもない。
ふと空を見上げた。果てしなく広がっている青空を真っすぐに一羽の野鳥が飛んでいく。何にも縛られず自由に。その姿を見て僕は覚悟を決めた。
ああそうだ。例え汚れようと僕は進むしかない。このままでは心の穴は広がり続ける。それを黙って見ているなんてできない。解決法が分からぬのならもがくしかない。だから、エスエスの集会へ向かおう。
「おい、お前！　勝手に列を崩すんじゃない！」
野太い大声が響いた。列を抜けようとする僕へ近くにいた教師か

ら声がかかった。ああ、岩瀬か。いつも奴は邪魔をする。渡辺さんとの食事はどうだったのだろうか。気になるところではあるが、今はどうでもよく思える。
　三角の壁が進行方向へ立ちふさがっていた。嘘をつくのは少し嫌だけれど、テキトーに適当な言い訳をすることにしよう。
「ちょっと腹痛で、お手洗いまで行こうかと」
「そう言って朝会をさぼるつもりじゃないのか？　体が弱い奴は、精神も弱いからな！」
「いえ、なんだか朝から体調が優れないので。早く行かせてもらえないでしょうか？」
「けっ、しょうがない。ここでもらされたら、臭くてたまらんからな！」
　岩瀬は黄色い歯を露わにげらげらと下品に笑った。そして同意を求めるように僕のクラスメイトへ視線を向けた。皆が苦笑する。拓馬だけは他のクラスの女子らに目を向けていた。
「……そうですね。では行かせてもらいます」
　こいつがデリカシーをどうこう言う権利はない。僕は足早にその場から立ち去った。

　途中、僕の部屋がある研究棟が見えた。この施設でもっとも高く、地上二十階もある高層ビル。塔のように高くそびえたち、白い壁と大きなガラスによって近未来的なデザインに着飾られている。電波塔のようで、どうにもあの地下に住んでいると言う実感がわかない。
　朝会を抜け出そうと、超能研には好き勝手に集まれる場所は存在しない。施設の屋内外ともに能力者が行ける範囲にはカメラが必ず設置されているし、警備員だって見回りしている。例外は個室内のバスルームや更衣室、そしてトイレくらいだろう。
　だが今回は流石に用を足すだけなので監視の目は甘いようだ。僕は最も近場のお手洗いへと向かっていた。それは尿意のためでも、腹痛のためでもない。集会に向かったのだった。

――運動場から一番近いトイレへ来てくれ

ラクはそう言ったが、そこで会議をするのだろうか。アンモニアの香りが漂う中で議論する姿が頭上に浮かび、そのままのしかかる。ああ頭を重い。彼に集まりの詳細を聞けずにいた。女子二人をつれたあの日から僕の部屋には現れず、彼とは会えずじまいだったのだ。

小さな一階建ての建物が目に入る。屋根はあずき色に塗られており、壁は灰色にくすんでいた。元のクリーム色が数年の放置のすえ色あせたのだろう。

超能研の敷地にはこじんまりとした倉庫が幾つもあった。ここは体育の授業で使う用具室で、お手洗いも併設されている。男子用の扉を開けて中へ入った。

「ここでいいのか？　ずいぶんと汚いな」

思っていたことが口から転げ落ちていた。中は小便器と個室がそれぞれ一つだけの狭いトイレだった。全体的に汚らしく、臭いもひどい。大きさは三人が入るのが限度だろう。僕以外に人影は見えない。

あの白く高い研究棟のトイレはウォシュレットもついていつも清潔なのに、能力者向けの施設はろくに清掃さえされない。文句を言えばこう返してくるだろう。自分たちで使うものなら自分で掃除しろ、と。そんな時間も許してくれていない癖に。

場所への不安はアンモニアと反応して、ラクという男の不信感に変化した。今からでも引きかえした方が良いのだろうか。ああごちゃごちゃ考えるのはやめだ。前に進もう。

辺りへ視線をさまよわすと個室のカギが閉まっていた。ドアをノックしてみたが、何も返ってこない。

「……ラクか？」

そう尋ねると錠が解かれた。扉を開けると赤い髪をした青年、ラクが壁に寄りかかっていた。片手を上げて会釈を済ます。ラクが身を乗り出して扉の鍵を閉めた。

「個室に来て欲しいなら先にそう言って欲しい。で、ここで何をす

るつもりなのだ？」
　僕は自然とラクから距離を置いていた。とはいえ狭い個室では半歩しか下がれなかった。
「まあ、そうカッカすんなよ。結局どうにかなったんだ。それでいいだろう？」
　ラクはそう言うと、扉と反対の壁に向かってノックをした。薄い壁なのか軽い音が響く。叩いた壁が波打った。僕の部屋に来たようにヒメと呼ばれた女性の超能力でこの壁をすり抜けるのだろう。
「この奥が、俺たちのアジトさ。まあ入ってくれ」
「いったいどういう能力なのだ？　壁を透過しているようだが」
　恐る恐る壁に手を触れる。その感触は液体に触れたかのようで、とても違和感がある。
「はあ？　細かいことは知らねえよ、ヒメの能力だ。……ほら早く行けや！」
「うおっ」
　踏みとどまっている僕の背中をラクが押した。僕は転がるように壁を通り抜けた。
　壁を抜けた先は薄暗く、目が慣れるまで時間がかかった。マット、ハードルなどが置いてある。どうやら隣の体育用具部屋のようだ。
　そこで三人の人影が目に入った。まず僕のすぐ隣、壁際にヒメと呼ばれた女性が立っていた。他の二人はそれぞれ部屋の角に佇み、互いに距離を取っていた。彼の言う仲間か。予想したよりだいぶ少ない。さて、どのような集会なのだろう。
　僕はここで『心の穴』を埋めることが出来るだろうか。

2．2

「ほれ、お前ら無言で突っ立てないで、自己紹介しろや！」
　ラクが声をはり上げると、僕の隣にいた女性が一歩進み出た。いつも彼と行動している唇が印象的なモデルのような子だ。栗色の髪を揺らし、僕の方へと振り返って口を開いた。

「私は、菊池姫。清心女子高の三年生。物体透過能力者（パッセンジャー）で干渉力は参種なの。よろしく」
彼女のふるまいはクールと表すにのがふさわしい。とげとげしいと言うわけではない。ただ変に可愛い子ぶり、こびを売るような響きは皆無だった。僕に対して拒絶も歓迎もなく、無関心という感じだ。
「……あっ！　ラク、すごい汗かいてる！　拭いてあげるね！」
そんなクールな彼女は話し終えるとラクへ駆けていった。ラクへとべったりとくっついて、ハンカチで彼の汗をぬぐう。うっとりとラクを見つめた。
ラクに話しかけた瞬間、菊池さんのクールな雰囲気は霧散した。年相応な少女らしい華やかな色気を発しだす。ラクとふれあう時はいつもそうなのだろうか。対する彼は平然とした態度のままだ。二人はどんな関係なのだろう。お熱いカップルのようには見えないけれど。
「俺は、桃木野光一、参種の電気信号操作能力者（ダイバー）。荻野宮工業校二年だ」
部屋の角からぼそっとした低い声が僕の耳に届いた。声の主は壁に寄りかかっている男で、初めて見る顔だった。ぼさぼさと黒髪を伸ばし、太い黒ぶちの眼鏡をかけている。長身でやせ気味だが、菊池さんのようなモデルという印象は受けない。
彼は僕の目を見ずに、下を向きながら話し続けた。人の目を見るのが苦手なのだろうか。
「このメンバーの副リーダーをしてる。白銀譲、お前は新入りなんだから俺の言うことを聞けよ。なあ？」
「僕はまだ君たちの行動に参加するとは決めていない」
「なんだよ。その口のきき方。上から目線ですか？　流石、進学校のインテリだ」
どうやら僕の情報はラクから紹介されているらしい。その上で、あまり歓迎されていないようだ。ここは彼らのホームなのだろうが、

その空気は僕を拒絶しているようだ。
岩瀬といい、今回の対応といい最近はうっぷんばかりが溜まっていく。それを破裂させないためにもエスエスとやらに参加したのに、今のところ逆効果にしかなっていないな。ぼそぼそ声の桃木野は挑発しているようだし。
「おい、よせよ桃木野。せっかくの新メンバーに何ほざいてんだ。それに学力でひがむなよ、みっともない。こいつはあの関東一の名門校、黒西に入ってんだ。俺たちと話し方が違うのは当然だろが」
ラクの擁護だか分からない横やりが入る。二人揃って馬鹿にしているのか、僕を。見学の機会をくれたのは感謝しているが、グループ所属したつもりはない。しかし口を出してばかりいても話が進まないので黙ろう。
「で、妹の日向子だ。お前と同じ弐種で、意志共同体（コミューン）の能力者だそうだ。年は高校一年生」
「……」
ラクが、もう一方の角を指さして紹介した。暗い一角に、マットに座った女の子がいる。金曜日の夜にラクと菊池さんと訪れた子だった。彼女の口は一直線に閉まっていて、言葉を発する気配すらなかった。そういえばこの子の声を聞いたことがない。
彼女はとても端正な顔立ちをしていた。ラクほどはっきりした赤ではないにしろ、髪の色はとても明るく、眼はぱっちりとして大きかった。そこに瞳が占める面積もまた大きい。兄の黒真珠とは違って灰色で、光の角度によってはサファイアのように蒼く輝いた。その日本人離れしたした姿から、まるで西洋人形のような印象を受ける。
彼女の瞳の奥にははつらつとした生命力溢れるオーラのようなものがあった。まだ加工されていない宝石の原石のようにも思えるし、また自発的に人形のように殻をかぶり輝きを隠しているようにも思えた。たいそう不思議な感想を述べさせる強い魅力があった。
「それに俺、宍戸楽太郎。俺も高校二年。能力はあってないような

もん。これが俺の同志どもだ。そんで『エスエス』と名乗っている」
一通り活動しているメンバーの紹介が終わったようだ。四人だけなのか。そのうちの一人はラクの身内だし。数十名単位で活動しているものと考えていたので肩透かしだった。
「じゃあ僕も自己紹介をさせてもらおう。僕は白銀譲。高校二年生だ。今日は興味があったので参加させてもらった。……どうやらあまり歓迎はされていないようだけれども」
「……」「……」「……」
僕の素直な感想が、静寂を作る。菊池さんと桃木野に睨みつけられた。
「白銀！　そういう態度は良くねえよ。って、お前らもそんなガンつけんなよ。俺たちが職員に何も言われてねえってのは、告げ口されてねえってことだろ？　それに素直ってのは、下手な慣れ合い野郎より良いことだ」
ラクが勢いよく早口でまくしたてた。彼の隣でベタついている菊池さんが、手を上げて子供のように「はーい」と返事をする。目の前でこうもいちゃつかれると、見ているだけで体感温度が上がる。暑苦しい。
桃木野は顎を上げ無言で僕を見下した。眼鏡をくいっとあげる。彼は僕を苛立たせるのが得意のようだ。ラクの妹、日向子からは反応がなかった。
僕はこんな話をするために来たのではない。岩瀬に断りを入れて朝会をぬけだしているのだ。奴に見つかる前に本題に入らなければ。
「で、、集まって何をしているのだ？」
「何をするかは未定だが、どうしたいのかは決まっている。目的は『自由』だ」
ラクがにやにやと笑う。とても幼い笑みだ。身長も相まって中学生に見えることさえある。大人っぽい顔立ちと、その表情の差が彼の内面を掴むのを困難にしていた。
「だから具体的には何を？」

嫌な予感が僕を襲ってくる。自分を少しでも客観的に見て、状況を把握しようと心がける。汗は肌の上をはって流れ落ちていく。ラクは言葉が足りないというよりも、その名が示す通りに楽観的な男ととらえた方が良いのかもしれない。

角から桃木野が、俯いたまま低い声で呟いた。長く伸びた前髪に隠れて表情は見えない。

「それを考えてるんだよ。良い学校通っていても頭は悪いんだな。俺の方がよくまわるね」

僕の予感が的中したようだ。頭が痛くなってきた。決して熱中症が原因ではない。

「方向性やら、どういう行動をするかは決まっているのだろう？」

「ぶっ潰す！　偉そうにのさばる職員どもをな。お前だって分かっているだろ？　黒西なんて名門校に通ってんだし。奴らは痛い目にあってしかるべきだ！」

ラクが目を血走して喜々と語る。薄暗い中、彼の黒真珠のような瞳は浪々と輝いて見えた。

「流石、宍戸さん！　最高です！　職員ら皆ぶっ潰しましょうよ」

桃木野が鼻息を荒くして語った。彼は心からラクを敬愛しているようだ。菊池さんは愛しくてたまらないと言う様子でラクを見つめている。日向子は平然と佇んだままだった。

この集会について僕は大きく思い違いしていた。ここは僕が求める場所、目的を果たせる場所ではないのだろう。集まってもラクたちが仲間とわいわいと騒ぎたてているだけだ。そしてもし上手くいけば、彼らは暴徒のようなってしまう。僕の目的を果たせはしない。

「どうかしたか？　白銀？」

ラクは僕の顔色から失望を読みとったのか声をかけてきた。自覚こそなかったものの僕はエスエスに大きく期待していたのだろう。だからこその失望だ。彼を睨みつけて声を返した。

「それが目的ならば、僕は断る」

「おい！　何でだよ？　お前だってぶっ壊したいんだろ？　この超

能研での暮らしを！」
「宍戸さん、そんな奴は放っておきましょうよ。頭でっかちのビビリ野郎なんですよ」
ビビリだろうと何だろうと言うが良い。僕は今の生活を変えたい。そのためなら規則も破ろう。だが他人に暴力をふるってモノを得る強盗にはなりたくない。暴力でこの暮らしが変わるとも思えない。渡辺さんにまで被害が及ぶだろう。そんなの御免だ。
「口を閉じておけ、桃木野。白銀、何が嫌なんだよ？　理由を聞かせろよ」
ラクが桃木野を軽く睨みつける。茶々を入れていた桃木野の口が開いたまま固まる。ラクは無表情で僕を正視した。僕はその視線を受けて口を開いた。
「不本意ながらも、僕たちが隔離される言い分はある。超能力は未知のもので、危険だろう？」
「言い分？　それが何だ？　俺たちは自由にする権利がないっていうのか？」
「そうじゃない。暴力事件を起こせば他の能力者も暴力者と偏見の目で見られるだろう。それだけではすまない、隔離される理由を僕たち自身が立証するようなものだ」
「白銀、難しいごたくは知ったこっちゃねえ。だが俺にも分かったことがある。お前はここがどんな場所か知らなすぎる。『超能研』そして、ここにのさばるクソ虫どもを」
ラクが呆れた様子で言った。僕だってここで一年以上暮らしてきた。そんな呆れられるほど状況を把握していないはずがない。彼こそ何か勘違いしているのだろ。そうやって物事を偏見で決めつける言い方も、言葉使いの悪さもあまり好きになれない。
「君の考えはとても偏っているよ」
「ああ、そうかもな。偏りってのは平均からずれてるってことだろ？　平均なんてどうでもいいさ。両羽が測りになったコウモリの天秤にはなりたくねえ。じゃあ聞くが、お前の考えはどうなんだ？

何を良いと思ってるんだ？　やりたいことがあって、俺たちのとこへ来たんだろう？」
ラクが真面目な顔をして尋ねた。茶化すでもなく、非難するでもなく、小学生が先生に分からないことを聞くような、そんな純粋な質問だった。
その問は鋭く、一直線に僕の胸を突いた。僕は彼がどんな弁論で僕を攻めようと常識と道徳の壁が守ってくれる、そう考えていた。だが、その質問は壁の隙間を容易にくぐりぬけた。
さっき口にしたのと同じ言い訳をして、僕はずっと行動してこなかったのだ。当然直ぐに答を用意できるはずがない。
悩んでいるうちに胸中にたまった苛立ちはどこかへ行ってしまった。迷っている間にも淡々と時は流れる。静寂は電子の鐘の音で破られた。
「ちっ、時間じゃねえか。先に白銀が出とけ。頼むぞ、ヒメ！」
ラクは早口で言った。朝会修了のチャイムが壁を通してくぐもって聞こえてくる。気付かぬうちにだいぶ時間が経っていたらしい。
菊池さんは目をつむり、右手を胸へ置く。それが能力を使う時の彼女の儀式なのだろう。もう片手で壁に触れると壁が波打った。僕は用具室から抜け出して朝会へと戻った。岩瀬に睨まれて長々と注意されたが、まったく頭に残っていない。違うものが既にそこを占拠していたのだ。
僕は、僕は何をしたいのだろう。その答えをラクたちが持っているはずがないのに、エスエスにあると信じていた。例え罪を犯してでもこの心に宿る焦燥感をどうにかしたい。何を求めている、白銀譲。分からない。何をすればいいのだ。違う。何をしたいのだ。

2．3

夕食と夜の検査を終えて部屋に戻った。夜八時にもなると、比較的涼しくなっていた。もしかしたら部屋に冷房をつけてくれているのかもしれない。

今晩はとてもじゃないがＤＶＤを見られる気分ではなかった。抜けかけた乳歯のように心がぐらついて落ち着かない。頭上に羽虫が飛びかって、何度手で払おうとまとわりついて旋回している。あの問題はそのように僕を悩ませた。

今日はトイレの個室に二人でこもり、体育用具室で密談し、そしてラクに尋ねられた。

――お前はどうしたい

答えられない。分からない。

昔から自分の意見を言うのが苦手だった。選択を委ねられることから逃げてきた。親は僕の進むべき道を丁寧に綺麗に整備し、手を引っ張って案内をしていった。どう進むべきなのか、その答えは全て親が持っていた。

僕が僕の意思を受信できない。それは壊れかけのラジオから流れる音声のようだった。ノイズばかりが邪魔をして、何を言っているのかまるで分からない。頭を叩いて直そうと試みたがその音は定まらなかった。

『……あの』

静電気のようなものが頭に走った。脳がしびれる感触だ。と言っても脳に痛覚はないはずだけど。どこか女子の声が聞こえた。周りを見回すが不審な点は見当たらない。空調の音を聞き間違えたのだろうか。

『あの！　聞こえてますか？』

「……誰だ？」

耳からではなく、頭の中から声が響いている。今までに感じたことのない不思議な感覚だ。これが有名なテレパシーというものだろうか。

『いえ、違います。さっき説明したはずです。《コミューン》です』

コミューン、確かに今日のいつだかに聞いた覚えがある。どこで聞いたのだろう。はっと薄暗い用具入れの部屋が思い浮かんだ。

「ラクの妹か？」

『そうです。　念話は口に出さないで頭で念じれば通じます』
相手は宍戸楽太郎の妹、灰色の瞳をした日向子か。見えない糸が彼女と繋がっている感覚がある。その糸を意識して彼女へと念じてみよう。小さい頃つくった糸電話を思い出すな。紙コップがない違和感はぬぐいきれないけれど。
『念話なんて初めてのものでね。マニュアルがあったら渡してほしい』
それにしても、対面とは違い能力だとしっかりと話せるのだな。メールだとキャラが変わるタイプの人なのだろうか。僕の言葉が通じたようで、彼女から返事が届いた。
『マニュアルとはいきませんが、簡単に説明します。その方が安心すると思いますし。この力では強く思ったことが多少は漏れます。意識しないでぼーっと考えていたら考えは流れて来ます。でも何でもかんでも送られてくるわけじゃ、ないです』
日向子は自慢するようでもなく、淡々と自分の能力について語った。
『これが私の能力（コミュニュー）です。複数の人の思念を《線》でつなげて、考えを送受信できる共通の《場》を作るの。思念が《線》によって繋がっている人たちは意図的に線へ向けて考えを送ることで、繋がった他の人たちと《場》で話し合うことができる。これで分かりました？』
『……ん、つまり君の能力はインターネットのチャットのようなものを、お互いに念じてできると考えればいいのかな』
『そうですね。使える距離が決まってますけれど』
鵜呑みにしていいものか迷うが、僕は彼女の言葉を信じて話を進めた。
『なるほど。で、君は意図して僕に通信をしているわけだろう。用件はなんだ？』
『明日、昼は体力テストでほとんどの能力者が同時に集まるはずです。そこで、上手く抜け出して今日と同じ場所、アジトへ来て欲し

いとのことです』
明日は月に一度ある体力テストの日だ。個人ごとに順番で検査するので、最初のほうで終えられれば抜けられなくはない。ちょうど屋外なので今日訪れたアジトも近い。弐種の僕がこうなのだから、管理が甘い参種や四種の彼らはもっと自由に動けるのだろう。
『分かった。もし可能ならば行ってみよう。だがそれでも十分程度しかとどまれないぞ』
『それでいいそうです。……これは個人的にお伺いしたいんですが……本当にあなたはエスエスに参加するつもりなんですか？　むいて、ないと思いますけど……』
『そうかもしれない。自分のことは分からないけれど』
確かにメンバーとのそりは合っていない。他人に言われてその自覚が確信に変わる。
『あなたはなんのために、エスエスに入ろうとしているんですか？』
『うまく説明できないな。そのことについては』
その答えは初対面の相手に明かす内容でもないし、何より僕自身が言葉に固めるほど把握していなかった。強い焦燥感に駆られて何かをしなくては不安が収まらない。そうとしか言えない。
『君の兄のように何がしたいかはっきり言える人はそう多くないだろう』
『そうですね。兄は正直で、そしてそのまま直ぐに行動を起こします。兄は気が早いんですが、とても優しいんです。この施設にいるのだって、そのためで……』
あのメンツは皆ラクへとベタ惚れのようだな。彼女の最後の一言にひっかかるものがあった。
『ここにいるのが優しさのためとは、どういうことだ？』
『……』
彼女から沈黙が返ってきた。だが、相手と回線が繋がっている感覚はあった。
『無理に答える必要ははないよ』

『いいえ。あなたがエスエスに入るか迷っているなら、知っておくべきだと思います』
軽い気持ちで聞いたが、それは兄妹に深く関わっていることのようだった。
『……兄は、本当は能力者じゃないんです。友人と結託して超能力を使ったとごまかして、この施設に入ったんです』
『どういうことだ？　彼は自分勝手にここに来た上に、文句をつけているのか？』
自由奔放に生きていそうなラクのことだ。それも在り得る。しかし幾らなんでも、その主張は自己中心的過ぎやしないか。
僕は強制的に日々この空間で生活させられている。そして渇きを覚えた。ラクは自分の渇望と、僕のそれを同一のものとして扱っている節があった。でももしそうなら根本的に違う。彼のは勝手な行動の結果で自業自得だ。
『貴方は勘違いしてます。今思ってることは多分、違います。《コミューン》で伝わるのは言葉だけじゃないから分かる。お兄ちゃんいえっ、兄は私を心配してここに……来たんです』
『ちょっと待て！　君のためとはどういうことだ？』
他人のために、家族のために、自分を束縛する空間に身を置いたのか。国を騙すという覚悟だって信じられないが、それが通ったら容易に出られないことは知っていはずだ。高校生活を棒に振るう覚悟で、彼は妹を心配して超能研に入ったのか。
『今言った通りなんです。私が心配でここへ来ました』
『超能研は別に監獄じゃないぞ。妹が心配だからといってそこに潜り込もうなんて普通は思わない。何が彼をそうさせる？』
もし家族が同じような境遇になったとして僕はどうするだろう。分かっている。傍観するだけだ。それは仕方がないことだからと言い訳をして。
『……』
線はつながっている感覚はあったが日向子に返答する気はないよ

うだ。
　ラクは自分が平然と送れるはずだった普通の日々を捨てた。能力者でも何でもない普通の高校生が、その強い意志を信じて行動した。僕の心を大きく揺さぶるのはその意志の強さだ。ちょっとしたことに悩んでいた僕とは違う。何をしていいか分らない僕とは違う。そう、僕とは違う。
　それが彼の原動力なのか。だが考えろ。妹を助けるために彼がここに来たというなら――
『一つ聞かせてくれ。君は、クソったれをぶちのめす、というような彼の行動についてどう思う？』
　ラクが望むのは自由。彼女の話しを聞く限り、妹のための自由なのかもしれない。彼は暴力という手段でそれを実現しようとしている。それには反対だ。彼がもしその方法に解決に固執していたら、僕はどうにかしてラクを止めなくてはならない。
『あまり好きじゃない。乱暴だし。でもお兄ちゃんだって望んでしているわけじゃない。仕方なく、仕方なくやっているの……』
『――仕方なくか。そうか、ありがとう』
　僕はそれを聞いて胸をなでおろした。ラクも、そして彼が手助けしようとした本人がその方法を嫌がっているのだ。それでもラクは暴力による解決しか思いつかなかったのだろう。違う手段を提案できれば、彼らの行動は変わるかもしれない。
　彼が大事にする妹の意見だ。大きく参考になるはずだ。
『お礼、なんで言うの？』
『素直に貴重な意見を聞かせてくれたからね。感謝したら礼をするものだろう？』
『……？　良く分かんないです。その、あの、失礼な発言をしてすみませんでした。……それでは』
『ああ。では、おやすみ』
　先ほどの熱弁を反省したのか、日向子の口調は申し訳なさげだった。そうして回線を切った。彼女はいわゆるブラコンというやつな

のだろうか。
心を揺さぶられて、自分の意思が少し明確になった気がする。壊れかけのラジオ、外れかけていたネジが幾つきつく締められた。やっと日本語だと分かるほどにノイズが薄くなった。
僕はずっとそしてうじうじと考えて行動しなかった。それが駄目なのだ。そういう駄目な自分から脱皮しようと焦っているのかもしれない。
僕は変わろう。僕が信じる僕になれるように。あの男が、強い意志を持ち行動に移してきたあの男が、その道しるべなるかもしれない。

2．4

あっという間に夜は開けたものの午前の授業は退屈で長く感じた。やっとのことでそれが終わると、僕は珍しく二人のクラスメイトに話しかけた。彼ら、坊主頭の男子と太り気味の男子に頼みこみ、先に体力テストをさせてもらえるように整えた。
体力テストを終えると、でへでへと話しかける拓馬を放置して、あずき屋根の体育用具室横のトイレへ向かった。おそらく十分程度は話しが出来るだろう。
熱い日差しを背に受けて、アジトへと早足で向かう。目的の場所についた。トイレのドアを開けると直ぐそこに人が立っていた。
「……」「……」
小便器で用を足している最中のぼさぼさ頭の男と眼があった。長身でやせ気味の眼鏡男、桃木野光一だ。挨拶をかけるタイミングを逃して二人揃って口をつぐんだ。この無言が周りの気体を個体に変えてしまったような気がした。ただ視線がぶつかった。なんだろうこれ。
個室の扉が勢いよく開き、その固まった空気をぶち壊す。ああ、救われた気がする。
「お前ら何見つめ合ってんだよ。気色悪いな。用意できたら中に入

れよ」
　ラクが現れた。彼の後ろ、個室の壁は波を打っている。どうやら菊池さんたちの準備はもう出来ているようだ。今日の僕は彼に会うために来たと言っても過言じゃない。冬の冷たい空気に触れた時のように体中の神経が引き締まった。
「見回りとかは大丈夫なのか？　僕の部屋へ来た時もそうだが、監視カメラにどう対応しているのだ」
　真っ先に本題に話しを持ってくこともできず、僕は以前から抱いていた疑問を口にした。「桃木野が電気を操れる能力なんだ。コンピュータでカメラを統制してんだろ？　でコンピュータは電気で動いてる。俺にはよく分からんが。能力ではっきんぐ？　とやらをして監視カメラの目をごまかしてんだ。後はヒメの壁抜けで来てんだけどな。お前の情報についても桃木野にコンピュータ探ってもらった」
　ラクのざっくばらんな説明でおおよそは想像できた。監視カメラの眼はかいくぐれても人の目は誤魔化せないのだろう。だから拓馬に発見された。見周りの警備員に会ったら終わりじゃないか。
「僕の知り合いが、君が抜け出しているのを見たそうだ。そこらへん、大丈夫なのか？」
「心配すんな。見周りの時間帯は調べがついてっから普段は大丈夫だ。予定外のことが起きると対応できねーってのはあるが、それはしょうがねえ。……ってそんな話をしに来たわけじゃないんだ。時間もないし早くアジトに入ろうぜ」
　彼の言う通り中身の薄い話題だ。僕はラクの内心へと踏みだしていいのか探っていた。
「あっ！」
　用を足しおえて、手を洗っていた桃木野が間抜けな声を漏らした。桃木野は僕の後ろ、トイレの出入口より先に何かを発見したようだった。彼は小声で僕らに声をかけた。
「やばいです。宍戸さん。教師がこっち来てる」

ラクは外からは気付かれぬように、壁伝いに入り口側まで向かった。後ろへ振り返ると、見知った顔が一直線に向かってきていた。逆三角形の黒いシュルエットが大きくなる。
「……はあ。僕のせいだ。ここで待っていてくれ。数人で同時に出たら怪しいからな」
なぜ奴はいつも僕の大事な時間を邪魔するのだろう。全く持って恨めしい。苛立っても仕方ないか。悪いことをしているのは僕なのだし。
二人を残したままトイレから出ると瞬時に岩瀬が駆け寄ってきた。遠くからでも分かるほどに鼻息が荒く、その姿は猪のようである。人語が獣に伝わらないように、どう言っても納得はしてくれまい。
「ずいぶん長いトイレだったな！　何をしていたんだ？」
「トイレにいたのですよ。用を足していたに決まっているでしょう」
「嘘をつくなっ！」
右頬に強烈な衝撃が走る。岩瀬が僕を殴った。流石に真っ先に暴力を振られるとはみじんも予想していなかった。その出来事に僕の思考が停止する。
「お前、渡辺に甘やかされているからって、調子にのるなよ。糞ガキがっ！」
呆然としていた僕を、遅れてやってきた激しい痛みが叩き起してくれた。
「……それは関係ないと思いますが？」
口の中が切れていたようだ。話すたびに痛む。痛みを感じるのも小学生の頃やんちゃをして以来のことに思える。
「口のきき方がなっていないようだな。なめるなよ？　俺を！」
岩瀬の顔が怒りに歪む。別になめているわけじゃない、嫌悪しているだけだ。無理やり襟をつかまれる。暴力的なおっさんだ。今気づいたが体罰じゃないかこれは。まあ、嘘をついた僕も非はある。そう、仕方ない。
プレハブの壁にまで乱雑に追いやられた。僕に見せつけるように

岩瀬が拳を握った。やつの顔に汚らしい笑みが浮かぶ。すぐに腹に鈍い痛みが走る。不快だ。不快でたまらない。
「おい、ガキ。分かったか？　お前の立場が。なあ？　おい？」
岩瀬が険しい顔で睨みつける。僕は歯向かえない。大ごとにすべきではない。後ろにいる二人のことを気づかれたら謹慎になるかもしれない。いつものように愛想笑いを浮かべて謝れいい、それだけだ。
「……いいえ。失礼ですが、あなたが何のこと言っているのか、さっぱりです」
僕は目をそらさずに奴へと微笑んだ。愛想笑いじゃなく嘲りの色をのせて。岩瀬の顔がより一層歪なものになる。僕の足を強く踏んだ。ぐりぐりと力を入れられる。つま先の痛み、そんなものはどうでも良い。爪が皮膚にめり込むほどに拳を強く握る。
人を殴っても許されると思ったのは始めてだ。いつもの僕と違う、白銀譲がそこにいた。たび重なる苛立ちでやけになっていたのか、それとも誰かに影響されたのか。岩瀬に黙って従う気など毛頭なくなっていた。
「てめえらは異常者なんだよ？　隔離されてるだろう？　あん？　そんな厄介ものが俺へとなめた態度をとって良いとでも思ってんのか？　いいわけねえだろう！　てめえらなんて、実験動物と同じなんだ。俺のサンドバッグにでもなればいい」
僕が岩瀬からの言葉をため息で返すと、奴は僕の顔に向かってつばを吐きかけてきた。全身に鳥肌がたつほど不愉快極まりない。だからこそ、こんな奴に屈してなるものか。
こういう男が、ラクの言っていた『クソったれ』と言うやつなのだろうか。ラクが、行動する理由が分かった。暴力で人の尊厳を踏みにじる、こんな男がのさばるなど許されるはずがない。渡辺さんのそばに、いてはらない。
――こんな不快な奴をこのままにしていいのか？　いや、良くない

壊れかけたラジオがやっと言葉を伝えてくれた。ああ、それが僕の意思だ。なんて簡単なことだろう。だが思うだけでは駄目だ。実際に行動へ移さなくては意味がない。僕がやるべき事は――

岩瀬は拳を振り上げて、僕の顔へと殴りかかった。僕はただそれを見ていた。その拳は僕へ届くことはなかった。

「何してんだよ。おっさん」

赤髪の青年が、岩瀬の右手を後ろから掴んでいた。ラク、ここで君が出てくるべきじゃないだろう。僕らが密会していたのがばれたら面倒なことになる。

深刻な状況なのに僕は笑っていた。まるで漫画の主人公のように都合良く登場したのが、何ともおかしかったのだ。

「なるほど。お前ら、二人つるんで何かしていたんだな。　ああ？」

「俺はただ小便してただけっすよ。すげえ音がすっから、手も洗わずやってきちまった」

平然としたラクの物言いに、岩瀬の顔が赤くなる。こめかみにミミズのように血管が浮かび出る。岩瀬は力いっぱい手を振ったが、ラクの手はほどけなかった。僕は頬についた唾液をぬぐって、その様子を眺めていた。

「で、おっさん。あんたは何やってんの？」

「おい！　ガキ、さっきから口がなってないんじゃ……ぐっ！　離せ！　てめえ！」

岩瀬の顔が信号のように赤から青に変わる。ラクにつかまれた右手がうっ血して肌が変色していた。岩瀬の顔から滝のように汗が流れ出ていた。奴が弱弱しく膝をつく。

「おい、やりすぎじゃないか！」

「……ほれ。お優しいこの人のおかげで助かったな。感謝しろよ」

ラクが一呼吸置いて岩瀬を開放した。奴は膝をついたまま、僕らを睨みつけた。

「超能力を使いやがって！　ひきょう者め！」

「俺は干渉力伍種なんだ。計測した数値データとしては能力者らしいが、なんにも超能力は使えねえんだよ、おっさん」
岩瀬が立ち上がり、ラクの前に立ちふさがった。岩瀬が地面に向かってつばを吐いた。
「くっ、お前ら！　何をやったのか分かっているのか？」
「あんたこそ、何をやったのか、理解できてんのか？　生徒への暴力はこの中でもまずいんじゃねえかな？」
ラクがニヒルな笑みを浮かべる。ラクの小さいはずの、その背中がとても大きく見えた。三十センチほどの身長差があるというのに、岩瀬を飲み込むほどの威圧感を醸し出していた。
「やんのか？　おっさん。――俺は構わない。お前が望むのならな」
「……けっ、覚えておけよ！　てっ、てめえら！　必ず尻尾つかんで地下室送りにしてやるよ！　知らねえだろうが、罰則用の拘束部屋があるんだ？　壱種の危険人物を閉じ込めるようにな。いつか、ぜってえお前らを送ってやる！」
岩瀬はそう吠えると立ち去った。僕とラクは並んで腰を下ろし壁に寄りかかった。
「無茶のしすぎだよ。君は。でも、お礼を言わないとな」
彼からはまるで返事がなかった。焦点の定まらない目をして、小さな声で呟いていた。僕の声など耳に入っていないようだ。
「ここは駄目だ。何とかしないと。じゃないとあの約束には……」
彼の眼が鉛のように鈍くなり、真珠のようなしとやかな輝きを失った。彼はいったい何を見据えているのだろう。僕は口を閉じて、ただ彼を観察していた。それだけなのにピリピリとした空気を吸って胃が熱くなる。重々しいプレッシャーを感じていた。
ラクが僕を見ずに、僕へ尋ねた。
「見ただろ。あんな奴を許していいのか？」
「……確かに僕はここを把握していなかった。君の言う『クソったれ』という人を理解した」
「あいつだけじゃないさ。あいつよりひどいやつもいる。だから、

やらなきゃいけないんだ、俺は。今度こそ……俺は」
ラクのその一言は異様に平坦なものだった。いつもの抑揚のある彼の言葉とは思えないほどに。彼の豹変ぶりに呆然と戸惑っていた。彼がやりたいこと、それは妹を助けることだと考えていた。でも、彼の黒真珠に写っているのは日向子ではない気がした。

2．5

平然と一日は過ぎる。超能研では朝六時から夜八時半まで、十四時間分の行動は規定されている。ここではそれに従って動くことが義務であり、それだけが生活だった。
僕だって最近まで、この夜八時半からの名だけの自由時間に満足していた。それを変えたのはラク、宍戸楽太郎という男だ。僕が今一番、興味を持っている人物なのかもしれない。
夜九時になった。この時間は部屋から出なければ自由行動が許されているので、僕はベッドに腰をおろしてくだらないバラエティ番組を見ていた。テレビの画面に集中してはいない。今日の岩瀬とのいさかい、ラクとのやりとりがまだ頭の大部分を占めていた。
昨日、ラクは体育用具室で僕にどうしたいか尋ねた。案を求めるということは、他の方法も検討しているのだろうか。言い方は悪いが、手段を問わないほうが僕にはありがたい。
（……ラクか？）
直観的に、それは超能力の予知能力などではなく、本当になんとなく、ラクが来そうな気配を感じたのだった。
「よお、白銀。邪魔するぞ」
僕の勘が当たったようで、壁が波打ちそこからラクがやってきた。その能力を使っているはずの菊池さんは後からついて来ず、彼は珍しく一人だった。
「集会はまた今度にやるんだろう？　今晩、集まるとは聞いてないぞ」
今日予定していた集会は岩瀬の登場で延期された。また近日に集

まるとは言っていたが、まさかこんな直ぐに来るとは本当に予想ができない男だ。
「まあ結局、お前と話したかっただけだからな。今度皆で集まるとしても、その前にお前とサシで話したかったんだ」
「ん、そうなのか。ちょうど良かった。僕も二人で話してみたかった」
最初の接触も、岩瀬とのひと悶着した時も、そして今日も、彼の訪問はタイミングが良すぎて怖くさえ思える。彼は床に腰を下ろし「暑いな」とか「床が固くてケツがいてえ」と不満を言いつつ、わが家のようにくつろぎ始めた。
「で、君が話したいことはなんだ？」
ラクはうつむいて、額に手をやった。彼は悩んでいるようだった。顔を上げると、頬を両手で叩いて、「よしっ」と気合を入れた。いったい何を言うつもりなのだ。
「話に入る前に一つ言わせてくれ、今日はすまん。お前を巻き込んだな。岩瀬に殴られて、痛い目に合わせた」
僕は驚いた。ラクが謝る姿を初めて見た。心から悔やんでいるようで、苦い顔をしていた。
「……君が気にすることじゃない。僕が進んでしたことだ。それに、君に助けられたしな」
「助けてなんかねえよ。気に食わなかったんだ、あいつが。……ん、そういやあのあと、岩瀬を見かけたな。あいつが普通にいるってことは、職員とかに報告してないのか？」
「泣きついて、あいつを追いやっても、何か負けた気がするからな」
今度はラクが驚く番だったようだ。ラクは目を丸くして、不思議そうに僕に尋ねた。
「そんな根性を持ってんのに、何であの時は殴り返さなかったんだよ？」
「……分からない。僕自身、人を殴ったことがなくてね。どう殴っていいか分からなかったのかもな。君が行動してくれて、すかっと

したよ。僕こそ礼を言うべきだ。ありがとう」
「殴ったことがない……のか？　へえ、そうか」
「ん？」
ラクへと聞き返した。彼は何か引っかかるようで、釈然としない様子だった。
「いや、やっぱり黒西の生徒さんと俺とでは色々と住む世界が違うんだな、と思っただけさ。……で、白銀も聞きたいってことがあるんだろう？　何だ？」
その質問に僕は少し戸惑った。僕は確かに彼から聞きだしたいことがあった。君が何を考え、何のためにエスエスを作ったのか。だがそれを直接聞く勇気はなかった。ふと、日向子から聞いた話を思い出した。
「妹さんから聞いた。君は能力者でもないのに、ここに入っていると。本当なのか？　岩瀬には伍種の能力者と言っていたが」
ラクは首を回して、天井を見上げた。顎をかいて真面目な表情を作った。
「日向子から聞いたんだな。……俺は身体測定の検診で判断されたわけじゃないんだ」
超能力者の認定方法は二つあった。一つは健康診断で行われる干渉力診断によるもの、もう目撃情報によるもの。実際に超能力を使った所を見られると超能力者の認定をされるらしい。僕の場合は前者で超能力者認定されたが、外では超能力を使える自覚すらなかった。
「超能力を使っているのを目撃されてここに連れてこられた、ってことになってる。実際はダチとグルになって、そいつに力で吹っ飛ばされたように演技してもらっただけなんだがな。ってことで俺は『超能力者』じゃないのさ」
「……自ら好き好んで入っといて、君はここが気に食わないと言うのか？　彼女のためとは聞いた。だが、どうして超能研に入ったのだ？」

何でそんな当然のことを聞くのだという表情で、ラクが目を細めて僕を見る。
「日向子と俺はずっと二人で過ごしてきたんだ。それなのにあいつだけ、こんな信用できない場所に閉じ込められることになった。これほどくそったれな場所にだぞ？　兄として一人で置かせるわけにはいかねえだろうが！」
その言葉には心地よい優しさが宿っていた。僕は一人っ子なので、兄弟や姉妹には少しは憧れるところもあった。妹のために、自分を犠牲にする。そしてそれを当然だと思っている。粗暴だと捉えていたのは僕の過ちだった。彼は他人を心から気遣える男なのかもしれない。
「僕には兄弟がいないので実感ができない。だが、兄妹とはそういうものなのか」
僕の目的なんて、初めは自分の『心』についてばかり考えていた。岩瀬のことだって私怨がほとんどだし、苛立ちに考えをのまれていた。あくまでも自分本位にしか考えなかった。自分の浅はかさを深く恥じた。
「白銀、俺は体育用具室で尋ねた。ここを変えるにはどうしたらいいと。お前は答えられなかっただろう」
僕がうじうじと過去の出来事を反省しているとラクがぽつぽつと語りだした。僕はうなずいて答える。
「だったら、一緒にその答えを探さないか？　多分、俺のおつむじゃダメなんだ。だからお前にここを変えるための策を考えてほしい」
ラクは頭を深く下げた。今日の彼の態度はえらく辛勝だ。
「……僕が、かい？」
僕が望んだ暴力以外の解決法、それを自分で決められる。断る理由もない魅惑的な提案だった。しかし、こんな情けない僕が行って良いものだろうか。いや、これはそんな自分を返上できる機会かもしれない。やれば、僕も変われるかもしれない。
「昨日一日迷って、俺はお前が適任だと思った。岩瀬のことだって

そうだ。俺は後先考えるのは苦手なんだ。他の三人だって俺の言うことを聞いてそのまま行動してる。お前のと同じ問いをしても悩みすらしなかったかもな。考えるタイプじゃねえんだ。このままじゃ、なんも変わらん気がする。だからこそお前を仲間に入れたんだ」

ラクは僕が思うよりも自分の周りを客観視できていた。粗雑な男と捉えていた僕は、やはり浅はかだ。しかし、なぜ僕なのだろう。彼の僕への過信が少し心配になってくる。

「正直最初は弱っちい男だと思ったぜ？　だがさっきの話を聞いてお前の強さを少し知れた」

「なんで、君は僕をそんなに信用する？　なぜ僕を選んだのだ？」

「そんなん知らん。勘だ」

「……それだけか？」

僕の一言に、ラクが深くうつむく。彼は陰のある笑みを浮かべた。どことなく自虐めいた色が垣間見える。彼は良く笑う男だったが、色々な笑みを持っていた。ラクが低い声で呟いた。重々しい雰囲気が広がる。

「……あえて言うなら、黒西高校の生徒だからかな。頭が良いと思って選んだんだよ」

そんな単純な理由に、僕は思わずふき出していた。もったいぶって言うことがそれか。

彼のあっけらかんとした性分、それは楽観的とも言えるし、考え無しともとれる。でも、不思議と僕の不安を吹き飛ばすような、そんな力を持っていた。僕が必死に悩んでいることを、たったひと吹きで頭の外へ飛ばしていくような。

僕は桃木野の言う通りだったのだろう。恐れていた、びびっていたのだ。だから拓馬の情報であれだけ心を揺さぶられたのだ。そしてラクと意見をぶつけ合う勇気もなかった。自分の保身ばかりを考えていたのだ。それが足を引きずった。

彼は違う。自らの身を犠牲にしてまでも、妹を、他人のためを考えていた。胸の中にあった疑念が消え失せる。ラクの目的は暴力じ

ゃない。彼の見据える先を知って、僕の決意は固まっていった。ラクが桃木野たちに敬われるのも少し分かった気がする。
「そうか。君の目的は自由、それだけなのだな」
「……？　何度も言っただろうに」
ラクは僕を信用してくれている。僕も、それに答えたい。拓馬たちだって表に出ていないだけで不満をもっているかもしれない。そんな彼ら、いや僕らのために、超能研の環境を改善したい。
なにより、僕は言い訳ばかりで行動しない自分を変えたかった。自分の意思を持って前に進み、人を助ける。そんな男になりたい。この作戦は良いきっかけになる。
「考えてみるよ。そんな事はしたことがないので、期待に添えられるかは分からない。だが僕が考える限り、あまり暴力的な作戦にはならない。それでも良いのかい？」
「いいさ！　方法なんてどうでもいい！　目的さえ叶えば」
「安心したよ。そしてもう一つ……僕も正式に君のグループに入れてもらいたい」
地下の拘束室がなんだ。そんなものを恐れてどうする。納得できないものには、立ち向かわなければならないだろう。僕の胸に熱い闘志が宿る。興奮のせいか首筋に異様な熱を感じる。彼は僕の誘いを受けてくれるだろうか。
「ふっ……ははははは。俺はもうとっくに仲間だと思っていたぜ？」
「じゃあ、僕が君らのグループに入ってもいいのか？」
「当然だろうが！　あえて聞くことでもねえ。ああそうだ。今日は良いもん持って来たんだ」
ラクは指を鳴らして、ズボンのポケットから赤い缶を二つ取り出した。白い文字でコーラと書かれている、街中の自動販売機に売っているようなありふれたものだ。だが超能研内では価値が違った。僕はそれを見て目を丸くした。
超能研では能力者には、お茶か牛乳くらいしか支給されていない。

たまに甘い飲み物が出たとしても、果物ジュースが限度だ。ここでは炭酸飲料はとても貴重なものだった。それなのにラクはどっから持ってきたのだろう。
「よし、じゃあ少しヌルいがこれで乾杯といこう。ずぼらな教員から頂いてきた。」
最後の一言は深く考えないことにした。彼の明るい表情につられ、多分、僕も笑っていたと思う。プルタブを開けた。白い泡があふれ出る。
「乾杯の前に一つ言っておく。俺らの秘密は守れ。決して裏切るなよ。ただそれだけだ」
ラクはそう言った。顔は笑っているが、目は笑っていない。僕は戸惑って口をつぐんだ。
「なに固まってんだよ！　ほれ、ようこそエスエスへ！　参謀、白銀譲！」
ラクが缶をこちらに向ける。僕も缶を合わせる。僕らは乾杯をした。それは、多分ラクなりの契りだったのだろう。僕はその意味をくみとって、掲げる缶に誓いをこめた。
「ああ、よろしく。リーダーさん」
僕は炭酸飲料が苦手だ。さらに言えば、ぬるいコーラなど、とてもおいしいものじゃないだろう。でも、なぜか僕は素直に飲めた。不快な感じはしなかった。一瞬おいしいとさえ錯覚していた。
「うげえ。やっぱ、ぬるいとまじいな」
ラクの一言で味覚が正常な状態に戻る。二人で喉を鳴らして笑い会う。こんな風に日が暮れてから誰かと笑い会うなんて、本当に久しぶりだった。
――僕は変わろう。自分の意思に従って一歩を踏み出す、そんな男に。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0710r/

エスエス

2011年3月5日19時27分発行